

## 育成世代における環境

### 1. 選手に出場機会を与える

#### ▶ 複数チーム登録 / 大会のルール

育成年代は選手に出場機会を与えることがとても重要です。これに対する障害がいくつかあるのが現実で、その一つは日本ならではの部活文化。中学の部活などでは、30～40人も部員がいることも多く、まったく試合に出られない選手もいます。一方、ヨーロッパでは1チームの人数は12人程度で、みんなが試合に出られる人数になっています。あぶれてしまう選手がいる場合にはBチーム、Cチームというように別チームを作って、試合にはみんなが出られるようにしているのです。このように大会に複数チームを登録できるようになれば、より多くの選手が試合に出場できるようになります。

また、勝利優先になると、どうしても技術のある選手だけを試合に出場させるというケースが増えます。勝つことが最優先のプロならばそれでも良いのかもしれませんが、育成年代ではより多くの選手に出場機会を与えるべきです。コーチが選手全員に出場機会を与えるように考えることと合わせて、環境作りという部分では大会のルールで決めてしまうというのも一つの方法です。現在、U12世代のバスケットボールのルールは、必ず10人以上が試合に出るように定められています。一人何分以上プレーするというのも、ルールになっています。



## 2. トライ&エラー

### ▶ リーグ戦制度の採用

コーチがより多くの選手を起用しやすくするために採用されているのが、リーグ戦です。負けたら終わりのトーナメントの場合は、どうしても主力選手ばかりの起用になってしまいます。一度負けても、負けた経験を次に生かすチャンスがあるリーグ戦であれば、より多くの選手を起用しやすくなります。多くの選手に出場機会を与えつつ、みんなで全力で頑張り、勝利を目指していく。選手にはやる以上は全力を尽くすことを教えることも指導者の務めです。

## 3. 能力に応じた出場レベル／部活動とクラブチーム

### ▶ 能力に適したステージでプレー

日本のバスケットボールは、小学校・中学校・高校でカテゴリーが分けられています。中学3年生で飛びぬけた選手がいたら、飛び級で高校生に交じってプレーすることがその選手の成長を促します。ヨーロッパのクラブチームの場合はすべてつながっているため、12歳の選手が14歳の試合に出場することもでき、14歳の選手が16歳の試合に出ることも可能です。能力の高い選手が年齢にかかわらず、適したステージでプレーできるのです。

日本も2018年からクラブチームの登録ができるようになりました。運動部活動ガイドラインと働き方改革の問題で、現在は部活が縮小傾向にあるため、もっとたくさん練習したい選手は、部活外のクラブチームや地域スポーツクラブでもバスケットボールをおこなうことができます。クラブチームの活動機会を増やすことを目的に、U15選手権やリーグ戦、クラブチームが出場できる大会をつくりました。中学だけでなく、今後は高校でもクラブチームが出場できる大会をつくっていきます。

## 4. カテゴリー分け

### ▶ カテゴリーは2年おきが望ましい

カテゴリーは2年おきが望ましいでしょう。3年おきにした場合、どうしても一番上と一番下の差が大きくなりすぎます。2年おきの場合の一つ上にチャレンジしながら自分を高めていくことができ、成功と失敗をバランス良く体験することができます。同年齢の中で高い能力を持つ選手は、成功ばかりだと努力を怠ってしまう危険性もあります。一つ上の世代にもまれて経験を積むことが成長につながっていきます。こうした環境をつくっていくことが大事で、まずはU12、U15、U18のリーグ戦。さらにはU13、U15のリーグ戦を実現できたらと考えています。



## 育成実績の評価

### 1.勝ち負けだけで評価しない

#### ▶ バasketボールを通じて社会で必要なことを学ぶ

スポーツは何のためにやるのか？ 親はなぜBasketボールをやらせたいと思ったのか？ あるいは本人はなぜBasketボールをやりたいと思っているのか？ 選手はそれぞれ頑張る理由があるはずです。進路選択のために頑張る人もいれば、純粋に楽しいからやる人もいるだろうし、勝ったときの喜びのため、うまくなりたいから……といろいろな理由はさまざまです。

Basketボールを通じてたくさんのことを学ぶことができます。共にプレーする仲間にもいろいろなタイプがいるため、気の合う仲間がいる一方で、合わない仲間がいることもあるでしょう。気の合わない仲間がいたとしても、一つのチームとして戦うときには、「気に入らないから」と言ってパスをしないというようなことがあってはいけません。チームの仲間と協力する、決まりを守るといったことを学んでいくこともとても大切です。



チームとして目的に向かって頑張っていくというのは、社会人になっても同じです。一つの組織、一つのセクションとして、みんなが同じ方向にベクトルを向けて協力していきます。このように社会で起きること、社会で必要なことを、バスケットボールを通じて学ぶことができる。これをライフスキルと呼びます。

勝つための指導をすれば勝利に近づきやすくなるのは事実。しかし、本当に最後まで勝つのは1チームだけです。だとしたら育成実績の評価は試合の結果だけでなく、ライフスキルにつながる指導をしている指導者もしっかりと評価すべきだと考えています。何のためにバスケットボールをやるのかということ指導していくことで、選手は心の豊かさを増していきます。

技術面でも目の前の試合に勝つことだけを考えた指導では、選手のためにならないことも多々あります。1対1のアタック技術、1対1のディフェンス技術、状況判断……いろいろの「い」となる基本をしっかり教え、将来花開くための土台を作ることが育成年代の指導者の役割の一つです。こうしたことをできている指導者が、素晴らしい指導者だという評価軸をもっと広げていかなければいけません。

